松村通信第１１６号

2021 年 2 月 15 日
松村勝弘

北京と上海

易中天「街を読む」　前々号で、易中天の中国の文化について書かれたものの一部を紹介しました。今回はその続きで、仲曄慶氏による易中天紹介論文の後半、『名城大学人文紀要』46 巻から 51 巻に連載されたもので、易中天の「**读城记**（街を読む）」の紹介です。その抜き書きです。これも面白いものでした。

人と同じように、都市にも独自の個性があります。ラフなもの、美しいもの、英雄的なもの、暖かいものがあります。たとえば、北京は「雰囲気がありエレガント」、上海は「オープンでエレガント」、広州は「活気があり新鮮」、夏門は「美しくて暖かい」、成都は「リラックスして自由」、呉漢は「卓越してタフ」だそうです。日頃中国人留学生などに接している人たちには彼らの出身地から、思い当たる節があるのではないでしょうか。ここでは主として北京と上海について抜き書きの形で紹介します。

中国の都市　北京は中国の最も気概のある都市である。上海にも親しみやすい上品で奥ゆかしい情調がある。上海人は細心で賢い市民であるといってよい。また、中国の北方の都市は概ね「男性的」であり、南方の都市は概ね「女性的」であるという。西安は中国の「最も男性的な都市」の一つである。それは西安がかつて男政治の象徴であったとか、強烈な西風に吹かれること、硬いマトンを食べること、「秦腔」という地方劇を吼えるように歌うことなどから、そういわれている。中国の最も女性的な都市は、江南水郷で、中でも、最も典型的なのは杭州で、中国人なら誰もが真っ先に、西施や白娘子、蘇小小といった女性の名が浮かぶそうである。南京は書生じみた都市、文人の町であるため、雄雄しさに欠けているという。

北京城　北京は「城」である。「城」とは城壁で囲まれた都市のことを指している。北京城は途方もなく大きい。北京の「大」は、面積の広さだけにあるのではない。新しい中国の首都としては北京は政治、経済、軍事、外交、科学技術、文化、教育、スポーツ、情報などのセンターを集めた全能型都市である。北京の気概は一言でいうと「大きい」である。中国で唯一北京と力比べをすることができるのは上海である。しかし、上海がいくら「大きく」ても、北京には勝てないのである。北京の「大」は、まず空間的な「容量の大きさ」にある。さらに重要なのは、北京の「大」が、内容が異なり性質の相反するものでも差別なく受け入れるという特徴を持っている。北京の「容量」の大きさは、建築空間にだけではなく、文化空間によってより一層鮮明に表されている。様々な民族や、儒教、キリスト教とイスラム教の様々な宗教が、この北京の地で出入りし、集まり、発展してきた。様々な文化もここで交流し、ぶつかり合い、融和してきた。北京はこれらの人や文化に対して、上目線でみんなを平等に見守るだけで、決して文化や人種に対して偏見を持たず、しかも、ほかの地域で通常よく見られるような頑固な「入ってはいけない」「地域文化性」さえも持たない。

北京はほぼ全中国人、全世界の人さえ包容することができる都市であるように思われる。上海は「大都市」であるが、上海人は「小市民」であるとよく言われる。北京には「小市民」が絶対にいない。北京の市民はみんな態度や言葉つきが大きい「大市民」である。「気前のよさ」というのは北京人が持つ共通する特徴である。北京人は身分の高低や貴賤に関係なく、みんな「温厚な気質」を持っている。北京人の誇りは、地域やコミュニティーの誇りであるというより、一種の民族の誇りである。北京平民の貴族風格は「礼儀」から由来している。メンツは北京人にとってはあまりにも重要すぎるのである。メンツを重く見すぎるのは北京人の欠点ではあるが、これは北京人の個々人の資質と関係なく、北京という都市の性質から由来するものである。

上海人と比べて　北京「平民」は高望みをすることや大言壮語することが好きであるのとは対照的に上海市民は細心で頭のよさを基に一歩一歩足場を固めながら着実に物事を進めることを得意とする。上海市民は実際の利益を持たない政治活動に興味がなく、政治に唆されることや言われるままに付き従うこともなく、むしろ政治に対して敬遠する態度をとる。北京人の処世術は悟りによるものにであ

るのに対して、上海人のそれは計算によるものである。

北京人の人間関係において最も大切なものはメンツと人情である。また、言語が婉曲であるという北京人の話し方の特徴も礼儀作法から由来するものである[ここを読んで、京都人も同じだと思いました。やっぱり京都が都だったからでしょうね]。この礼儀作法を身に付けるために、よく思案することや教養なども勿論必要であるが、最も重要なのは自分の身の程をよく知った上で、分相応な行動をすることである。上海市民は、北京平民と同様、「分相応な考え」を持っていない(これは中国人が持っている共通性でもある)。上海人は北京人と同様、辛抱することがよくできるのである(これもまた中国人の持っている共通性である)。同じ辛抱することであっても、北京人はひたすら耐えるのに対して、上海人は粘るのである。上海人の処世術は北京人の処世術より積極的であると言えよう。上海人の生き方は北京人と違う。上海人の生活は世俗的で、あらゆることが綿密に計画された上で着実に進められるようになっている。上海人が持つ最も貴ぶべき品性は理性精神である。

上海灘　上海は中国最大の都市であるだけでなく、中国の最もよく最も立派な都市の一つである。北京と同じように、上海も中国人が最もあこがれる場所である。上海に対して好感を表す場合、上海を「大上海」と称す。一方、上海に対して不満を表す場合、上海を「上海灘」と称す。上海灘の名声がよくないのと同様、上海人の評判もあまりよくない。「外地人」[上海以外の中国人]の目には、上海人という呼称は、時にはケチ、人をだます、虚栄、奸商、温厚でない、ずるい、心が狭い、付き合いにくいなどの「欠点」の代名詞となる。上海人が上海語を話すときのあの「傍若無人」の態度。確かに、「外地人」が最も嫌うのは、二人以上の上海人が一緒になったとき、上海人たちはそばに人がいないかのように大きな声で上海語を話すことである。しかし、上海人には語学才能があるというのは中国では公認の事実である。上海人の心の奥底には、「外地人」を見下す気持ちがある。上海人は「中央」の北京人や「金持ち」の広東人よりも「外地人」を見下すのである。しかも、上海人の「外地人」に対する軽蔑は普遍性を持っており、すべての「外地人」を区別することなく全員を見下す。

上海人の特徴は一種の文化的特徴である。中国の他の地域と比べ、上海コミュニティの異質度は極めて高いといえる。だからこそ、上海人は中国のどこに行っても非常に目立つし、至るところで物議を被るのである。上海文化の優位性はまさしく他人にも認められている。多くの「外地人」が敵愾心を燃やして上海人を糾弾、風刺しているにもかかわらず、上海を見下す人は決していないし、上海を否定することができる人も決していない。上海人は上海文化の創造者と継承人であり、上海人がいなければ、上海文化もない。上海人は自分のコミュニティの優位性に確信を持っているようである。

上海は中国全国最大の工業、貿易、金融と水上運輸事業のセンター、極東屈指の現代化大都市になったのと同時に、文学芸術の面でもアジア一であったといえる。事実上、ある意味では、上海は中国の新文化運動の発祥地でもあった。

上海人と「外地人」の間の矛盾は煎じつめれば、伝統と現代の衝突である。「外地人」にとって上海人の気に食わないところをまとめると、主にケチ、利己的、細かく算盤をはじくという三点である。中国の伝統社会では、豪快を尊ぶことから自然にケチを軽蔑し、遠慮することを徳とすることから自然に利己的であることを憎み、朴訥を美とすることから自然に細かく算盤をはじく人を嫌うのである。

新上海人　上海人が百年をかけて身に付けてきた、仕事に真面目に取り組む姿勢、契約観念や合理主義なども、中国の目指している市場経済の発展と世界標準に向かって進むことに一致している。上海という都市は、開放的で、多元的で、玉石混交ではあるが、善し悪しを知らないわけではない。「都市部落」として、上海は常に頑固なぐらいに自らのコミュニティ性を守ってきた。このコミュニティ性がまさしく現代や未来という方向を指している。上海人は上海人のままでありながら、自らの文化に対して、今までしてきたような内省を通し、その欠点を取り去って長所を残すことによって、上海人が「最も物言いを招く人々」から「最も優れている人々」に生まれ変わる日は間近であるはずである。

ＨＰ，ＦＢを見て下さい。又何でも意見を。
皆さんのご意見を歓迎します。HP（http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/）もご覧下さい。**フェースブック**もやってます。また，メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい（matumura@mba.ritsumei.ac.jp）。